

令和4年度
私学経営研修会
 実施報告

◇主催 一般財団法人日本私学教育研究所
 ◇後援 北海道、札幌市、北海道私立中学高等学校協会、日本私立中学高等学校連合会

研究のねらい
躍進する私学
～未来をつくる経営とは～

新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の事態に襲われ早2年。混乱が続く中、私学はいち早くニューノーマル時代に対応し学びを継続しながら、新時代に即した教育に取り組んできた。その取り組みを更に前へと進める必要があるだろう。

今年度当研修会は「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」を研究のねらいに開催する。開催地に縁のある講師による講演、中央と地方からの最新情報報告、私学の経営トップによるパネル・ディスカッションに加え、グループ討議形式での意見交換会と懇談による交流を行う。さらに、北海道で特色ある教育を実践する酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校、北嶺中・高等学校を視察する。

私学の源である建学の精神を見つめ直しながら、社会の変化を乗り越える私学経営のあり方を模索し、私学の躍進を目指す。当研修会を通して、全国の私学人が多様な視点と経験、知見、喫緊の課題を共有できれば幸いである。

★会 場★ **札幌プリンスホテル国際館パミール**（北海道札幌市）

〒060-8615 北海道札幌市中央区南3条西12丁目

（JR「札幌駅」より車約10分／地下鉄東西線「西11丁目駅」より徒歩約6分）

★会 期★ **令和4年6月2日(木)～6月3日(金)**

★参加者数★ **124名**

★参加対象★ **理事長、校長、副校長・教頭、事務長またはこれらに準ずる管理職の方**

※参加対象校は、都道府県私学協会加盟の私立中学校・高等学校・中等教育学校

★プログラム★

時刻	8 30	9 30	10 45	11 30	12 30	13 30	14 10	15 15	16 30	17 30	18 30	19 30
初日	受付	開 会 式	講演	基調講演	昼食	報告 I	報告 II	パネル ディスカッション			教育懇談会	
2日目		意見交換会		分科会	全体 会	総 括	昼食	移動	学校視察			

一般財団法人日本私学教育研究所 私学経営研修会担当 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-3-8 市ヶ谷UNビル6階
 電話 03(3222)1621 FAX 03(3222)1683 ホームページ URL <https://www.shigaku.or.jp/>

☆ 研修会日程・プログラム

【1日目】6月2日(木)

《会場》札幌プリンスホテル国際館パミール3階「大沼」

司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

8:30-9:00	受付
9:00-9:30	開会式 ◆主催者代表挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 ◆開催地代表挨拶 西岡 憲廣 北海道私立中学高等学校協会会長 ◆来賓祝辞 鈴木 直道 北海道知事 ◆来賓祝辞 秋元 克広 札幌市長 ◆役員・専門委員紹介 ◆研修会運営方針説明 長塚 篤夫 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長・私学経営専門委員長
9:30-10:45	講演 ◆演題 「教育政策と私立学校」 ◆講師 吉田 晋 日本私立中学高等学校連合会会長・一般財団法人日本私学教育研究所理事長
11:00-12:30	基調講演 講師紹介・謝辞 浅里 慎也 北海道私立中学高等学校協会副会長 ◆演題 「伝えるのは命 繋ぐのは命」 ◆講師 坂東 元 旭川市旭山動物園園長
12:30-13:30	昼食
13:30-14:00	報告Ⅰ ◆テーマ 「北海道私学の現状と課題」 ◆報告者 木村 重成 北海道総務部教育・法人局学事課課長
14:10-15:00	報告Ⅱ ◆テーマ 「未来を自分達でつくることのできる、クリエイティブ・クラスの若者の養成」 ◆報告者 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長
15:15-17:30	パネル・ディスカッション ◆テーマ 「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」 ◆パネリスト 北村 聡 京都外大西高等学校前校長 浅里 慎也 北星学園女子中学高等学校校長 鈴木 康之 水戸女子高等学校理事長・校長 ◆コーディネーター 広石 英記 東京電機大学副学長
18:00-19:30	教育懇談会 ※着席形式 《会場》同6階「美瑛」 ○開会 ○主催者挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長 ○乾杯 明上山勝己 北海道私立中学高等学校協会副会長 ○次年度開催地代表挨拶 八尋 太郎 福岡県私学協会会長 ○閉会挨拶 山中 幸平 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長



酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校



北嶺中・高等学校

【2日目】6月3日(金)

《会場》札幌プリンスホテル国際館パミール6階「美瑛」

司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

9:00-11:50	<p>意見交換会(分科会～全体会)</p> <p>◆テーマ 「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」</p> <table border="1"> <tr> <td>【総合進行役】</td> <td colspan="2">摺河 祐彦 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員</td> </tr> <tr> <td rowspan="6">【世話役】</td> <td>長塚 篤夫 副理事長・私学経営専門委員長</td> <td>浅里 慎也 私学経営臨時委員</td> </tr> <tr> <td>鈴木 康之 私学経営副専門委員長</td> <td>山中 幸平 副理事長</td> </tr> <tr> <td>西岡 憲廣 私学経営専門委員</td> <td>平方 邦行 理事・所長</td> </tr> <tr> <td>摺河 祐彦 私学経営専門委員</td> <td>加藤 晃孝 八王子実践中学高等学校校長補佐</td> </tr> <tr> <td>大多和聡宏 私学経営専門委員</td> <td>須藤 勉 東京私学教育研究所参与</td> </tr> <tr> <td>菅沼宏比古 私学経営専門委員</td> <td></td> </tr> </table>	【総合進行役】	摺河 祐彦 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員		【世話役】	長塚 篤夫 副理事長・私学経営専門委員長	浅里 慎也 私学経営臨時委員	鈴木 康之 私学経営副専門委員長	山中 幸平 副理事長	西岡 憲廣 私学経営専門委員	平方 邦行 理事・所長	摺河 祐彦 私学経営専門委員	加藤 晃孝 八王子実践中学高等学校校長補佐	大多和聡宏 私学経営専門委員	須藤 勉 東京私学教育研究所参与	菅沼宏比古 私学経営専門委員	
【総合進行役】	摺河 祐彦 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員																
【世話役】	長塚 篤夫 副理事長・私学経営専門委員長	浅里 慎也 私学経営臨時委員															
	鈴木 康之 私学経営副専門委員長	山中 幸平 副理事長															
	西岡 憲廣 私学経営専門委員	平方 邦行 理事・所長															
	摺河 祐彦 私学経営専門委員	加藤 晃孝 八王子実践中学高等学校校長補佐															
	大多和聡宏 私学経営専門委員	須藤 勉 東京私学教育研究所参与															
	菅沼宏比古 私学経営専門委員																
9:00-11:20	<p>1. 分科会(グループ討議)… 重点テーマを中心に小グループで討議</p> <p>重点テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 新時代の経営ビジョン(建学の精神、リスクマネジメント、組織活性化) ② 次世代を育む教育(ICT活用教育、グローバル教育、探究学習・PBL) ③ これからの教職員のキャリア形成(働き方改革、採用、育成・研修・評価) ④ 私学の特色と情報発信(特色教育、生徒募集、広報、ブランディング) 																
11:20-11:50	2. 全体会(分科会報告/意見交換会)																
11:50-12:00	総括 長塚 篤夫 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長・私学経営専門委員長																
12:00-12:40	<p>昼食 ※視察先学校へは会場ホテルからバスにて移動します。</p> <p>※学校視察Aコース参加者は総括後すぐに、Bコース参加者は12時30分迄に会場1階ロビーにお集まり下さい。</p>																
Aコース 12:00-16:00	<p>学校視察 (ホテルより貸切バスにて移動) *時間・内容は変更となる場合があります。</p> <p>Aコース 酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校<男女共学校・酪農教育> [江別市・会場からバスで60分]</p> <p>12:00 札幌プリンスホテル国際館パミール出発⇒学校視察 13:00～15:00(内1時間昼食) ⇒札幌駅(16:00着)⇒札幌プリンスホテルへ</p> <p>※Aコースは視察校で昼食(学園生産物を活用した特製ランチボックス)をとります。 ※学校視察は貸切バスで移動します。</p>																
Bコース 12:40-16:00	<p>Bコース 北嶺中・高等学校 <男子校・特色教育、スポーツ、寮> [札幌市・会場からバスで60分]</p> <p>12:40 札幌プリンスホテル国際館パミール出発⇒学校視察 13:40～15:00 ⇒札幌駅(16:00着)⇒札幌プリンスホテルへ</p> <p>※Bコースは会場での昼食後移動となります。</p>																

◆参加者へのお願い◆

当研修会において主催者記録係以外による録画・録音を禁止しております。また、講師・発表者の許可無く写真・内容等をHP・ブログや各種SNS等へ掲載することにつきましても禁止しております。ご理解・ご協力の程よろしく申し上げます。また、今後、当研修会の広報活動等で主催者記録係が撮影した写真を使用させていただく場合がございます。会場内の様子を撮影する関係上、参加者が映り込む可能性がございますので、予めご了承下さい。

○視察校での写真撮影について

生徒個人が特定できる顔写真等の撮影は禁止とします。撮影した写真は学校内の研修や報告等に活用する場合に限り使用を許可しますが、学校のホームページや紀要・報告書等への掲載、参加者個人のSNSやインターネットのサイトへのアップロードは禁止とします。また撮影写真の使用後は速やかに破棄いただきますようお願いいたします。また、動画(ビデオ撮影等)についてはすべて禁止とします。視察中は視察校の指示に従って行動して下さい。

基調講演講師プロフィール

坂東 元（ばんどう げん） 旭川市旭山動物園園長

1961年、北海道旭川市生まれ。86年、酪農学園大学酪農学部獣医学修士課程修了。同年5月より、旭川市旭山動物園獣医師として勤務。95年、飼育展示係長。2004年、副園長に就任。09年から園長を務める。

1997年の「こども牧場」から「ペンギン館」「あざらし館」「ちんぱんじー館」「レッサーパンダ舎」「エゾシカの森」「きりん舎かば館」まで施設のデザインを担当、数々のアイデアを出し具体化してきた。また手書きの情報発信や、もぐもぐタイムなどのソフト面でも係の中心となり具体化、システム化を図ってきた。

旭川市旭山動物園では「ボルネオへの恩返しプロジェクト」などの環境保全活動や、学校と動物園双方が融合した教育活動の在り方を探る、大学、学校、動物園の三者間の合議組織「旭山動物園教育研究会（GAZE）」の取り組みなど教育活動にも力を入れている。



講師・指導員（順不同）

- 坂東 元（旭川市旭山動物園園長）
- 木村 重成（北海道総務部教育・法人局学事課課長）
- 西岡 憲廣（札幌山の手高等学校理事長・校長）
- 西田 丈夫（酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校校長）
- 谷地田 穰（北嶺中・高等学校校長）
- 浅里 慎也（北星学園女子中学高等学校校長）
- 北村 聡（京都外大西高等学校前校長）
- 鈴木 康之（水戸女子高等学校理事長・校長）
- 広石 英記（東京電機大学副学長）
- 加藤 晃孝（八王子実践中学高等学校校長補佐）
- 須藤 勉（東京私学教育研究所参与）
- 吉田 晋（富士見丘中学高等学校理事長・校長）
- 平方 邦行（一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長）
- 山中 幸平（学校法人山中学園学园长）

専門委員・指導員（順不同）

- 長塚 篤夫（順天中学高等学校校長）
- 鈴木 康之（水戸女子高等学校理事長・校長）
- 西岡 憲廣（札幌山の手高等学校理事長・校長）
- 摺河 祐彦（姫路女学院中学高等学校理事長・高校長）
- 大多和聡宏（学校法人大多和学園理事長）
- 菅沼宏比古（学校法人西海学園理事長）
- 浅里 慎也（北星学園女子中学高等学校校長）
- 川本 芳久（一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長）

令和4年度私学経営研修会《視察先学校》

北海道の私立中学高等学校は、それぞれの建学の精神のもと、独創性豊かで先取的な教育を展開しています。
今回の学校視察では、北海道私立中学高等学校協会の全面的な協力によって、
酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校【Aコース】、北嶺中・高等学校【Bコース】を訪問します。

Aコース 酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校

【理事長 谷山 弘行 学長 堂地 修 校長 西田 丈夫】

酪農学園は、1933年に日本酪農の父と呼ばれる黒澤西蔵翁が設立した北海道酪農義塾に始まり、幾多の変遷を経て、現在は酪農学園大学、大学院、及び大学附属とわの森三愛高等学校を運営しています。大学は、2学群5学類、高校は全日制2学科5コース及び通信制課程2学科各2コースで、「農業、食料、環境、生命」のキーワードを共有しながら、大学約4,000名、高校は1,100名が、札幌に隣接する江別市で自然豊かなキャンパスを共有し教育活動を展開しています。設立当初は、酪農産業の経営者育成を目的としていましたが、現在では、広く産業界に人材を輩出し、多様な学問領域を有した総合大学、特色あるコースを設置する高校となっています。

高校においては、スポーツ活動も盛んで、多くの部活動が、全道全国レベルで活躍し、2020東京オリンピック出場選手を輩出しています。

また、高大が連携して共同の農場運営を展開し、酪農のみならず、幅広い農業分野で活躍できる人材育成にも力を入れています。農学と農業の融合化を図り、建学の精神「三愛主義」「健土健民」思想の具現化に邁進しています。

☆視察プログラム

12:00	札幌プリンスホテル国際館パミール出発（貸切バス）
12:50	酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校到着
13:00	歓迎セレモニー（研修館） ・学園理事長歓迎挨拶 ・昼食（学園生産物を活用した特製ランチボックス）／スケジュール案内
13:35	キャンパス見学（バス移動） ～ 附属動物病院、中央館、作物ステーション、黒澤記念講堂等
14:45	閉会セレモニー（黒澤記念講堂） ～ 質疑応答、意見交換、お礼の言葉（視察団代表）・学長閉会挨拶
15:00	視察終了、札幌駅経由（16:00着予定）、会場ホテルへ（貸切バス）

Bコース 北嶺中・高等学校

【理事長 丹田 貢 校長 谷地田 穰】

本校は、昭和61年に中学校が、平成元年に高等学校が開設された併設型の中高一貫校です。1学年120名の少数精鋭の男子校で、柔道、ラグビーを「校技」として、文武両道の教育を通して未来のリーダーの育成を目指しています。校舎は、北海道の大自然の中にあり、心身を鍛える場として最適な学習環境にあります。

進学校としての大学進学実績を積み重ね、令和3年度合格実績は、東京大学7名(理科三類現役3名)、国公立大学医学部医学科51名(現役44名、現役合格率全国2位)、京都大学、一橋大学、東京工業大学、大阪大学、東北大学、北海道大学など、国公立大学131名(うち現役101名)でした。

また、全校生徒のおよそ半数が併設の寮（青雲寮）で生活をしており、「青雲寮コース生」と呼ばれます。「青雲寮コース」は、難関大学をめざす生徒が、学習面、生活面での様々なサポートを受けることができるコースです。寮は大変人気で、学校に合格できても寮に入れない生徒が多数出ている現状です。

さらに、グローバルプロジェクト、サイエンスプロジェクト、メディカルスクール、ロースクール、ビジネススクール、プログラミングアカデミー、北海道プロジェクトという本校独自の探究活動を通し、思考力、判断力、表現力、協働性等を涵養しています。

☆視察プログラム

12:40	札幌プリンスホテル国際館パミール出発（貸切バス）
13:40	北嶺中・高等学校到着 歓迎セレモニー（3番教室） ・校長歓迎挨拶 ・学校紹介
14:00	青雲寮見学
14:25	学校見学（授業・施設視察）
14:50	閉会セレモニー（3番教室） ～ 質疑応答、意見交換、お礼の言葉（視察団代表）
15:00	視察終了 札幌駅経由(16:00着予定)、会場ホテルへ（貸切バス）

◆概要◆

66回目となる令和4年度当研修会は6月2日(木)～3日(金)、北海道札幌市・札幌プリンスホテル国際館パミールにおいて「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」を研究のねらいに開催し、22都道府県から、定員を超える124名が参加した。

開会式では、藤原俊之・北海道総務部長、町田隆敏・札幌副市長が臨席され、鈴木直道・北海道知事、秋元克広・札幌市長に代わり祝辞を披露した。全体会では吉田晋・日本私立中学高等学校連合会会長、平方邦行・日本私学教育研究所所長による最新の中央情勢に関する講演・報告、坂東元・旭川市旭山動物園園長による基調講演、木村重成・北海道総務部教育・法人局学事課課長による北海道私学の現状と課題についての報告が行われた。北村聡・京都外大西高等学校前校長、浅里慎也・北星学園女子中学高等学校校長、鈴木康之・水戸女子高等学校理事長・校長をパネリストに迎えてのパネル・ディスカッションでは、コーディネーターの広石英記・東京電機大学副学長から提示された、私学経営で最も大切にしていること、多様な入学者に個別最適な学びを提供する工夫、少子化時代に対応した私学の経営戦略など幅広い内容について事例紹介・質疑応答と提言がなされた。その後、参加者は十分な感染防止策を講じて実施した教育懇談会で交流を深めた。

2日目は「新時代の経営ビジョン」「次世代を育む教育」「これからの教職員のキャリア形成」「私学の特色と情報発信」を重点テーマに各校が直面する諸課題について語り合い、経験と課題を共有した。午後の学校視察では、北海道の特色ある教育を実践する、酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校及び北嶺中・高等学校を視察した。

参加者からは「私学のおかれている様々な状況が分かった」「動物園経営と学校経営の共通性から学ぶことが非常に多かった」「有益な情報交換ができた」「新しい発見が多くあった(学校視察)」など、好評が寄せられた。

地元関係者の協力のもと、私学の躍進を目指して企画実施した本年度当研修会は、所期の目的を達成し成功裡に終了した。

◇開会式◇



(吉田晋・当研究所理事長、西岡憲廣・北海道私立中学高等学校協会会長、藤原俊之・北海道総務部長、町田隆敏・札幌副市長、長塚篤夫・当研究所副理事長・専門委員長)

○主催者代表挨拶 吉田晋（当研究所理事長）

今年度当研修会には、3年ぶりに定員を超える参加者にお集まりいただいた。38名は北海道からの参加であり、北海道私立中学高等学校協会の多大なご協力に感謝申し上げます。我々私学が、未来を担う子供たちを育てているという思いを持ってもらいたい。一堂に会し様々な良い考えを共有して、今後の教育に役立ていただきたい。

○開催県代表挨拶 西岡憲廣（北海道私立中学高等学校協会会長）

私学を取り巻く状況が厳しさを増す中、私学の魅力をさらに高める一層の努力と、安定した学校経営や教育水準の維持向上が求められている。当研修会は私学経営について幅広く学ぶ貴重な機会だ。感染拡大予防対策を講じながら、北海道の魅力にも触れていただきたい。当研修会が実り多いものとなるように祈念申し上げます。

○来賓祝辞 鈴木直道（北海道知事）【藤原俊之（北海道総務部長）】

時代の転換期を迎える現在、建学の精神に基づいて、多様化するニーズに応じた特色ある教育を実践する私学にますますの期待が寄せられている。当研修会を通じて得た知見やネットワークを大いに活用され、全ての若者が将来の希望を持って可能性を発揮できる社会の実現に繋がることを期待申し上げます。

○来賓祝辞 秋元克広（札幌市長）【町田隆敏（札幌副市長）】

少子高齢化のピークを迎えてもなお発展を続けるためには、それを担う子供たちの健全育成が重要だ。私学教育には、多様な人材の育成や特色ある教育の推進など、公教育とは異なる魅力が沢山あり、私学教育と公教育が協働していくことが重要だと考えている。当研修会を機に、皆様の一層のご活躍を祈念申し上げます。

○研修会運営方針説明 長塚篤夫（当研究所副理事長・私学経営専門委員長）

今年度当研修会は「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」を研究のねらいとする。私学の源である建学の精神を見つめ直しながら、社会の変化を乗り越える私学経営のあり方を模索し、私学の躍進を目指す。多様な視点と経験、知見、喫緊の課題を共有できれば幸いだ。

◇講演◇

「教育政策と私立学校」 吉田晋（当研究所理事長・日本私立中学高等学校連合会会長）

コロナ禍によって、今まで当たり前だったことがそうでなくなり、新たに始まったことが当たり前になってきている。その1つがICTだ。コロナ禍以前のオンライン授業は、全ての子供たちがオンライン学習することを想定してはいなかった。文部科学省では、タブレットは3人に1台学校があれば良いとしていたが、経済産業省から突然GIGAスクール構想が飛び出し、1人に1台のパソコンが求められることになった。しかし、2020年3月から6月までの休校の際、双方向オンライン授業ができた中学高等学校は10%を下回る。その中で私学は、一校一校が時代を考えていた。これが後々の生徒募集の状況に影響している。



今回は喫緊の課題について追加資料を出している。5月24日付で日本私立中学高等学校連合会から、協会長・事務局長宛に出した通知だ。コロナ禍やウクライナ問題で石油は値上がりし、円安となっている。日本は輸入に頼っているため、費用面で影響を受けている。コロナにより、エアコンを効かせて窓を開けている。この光熱水費は国が保障すべきではないかと考えている。国の新型コロナウイルス地方創生臨時交付金が拡充されている中で、私学もコロナ禍における原油高騰分に対する保障の対象となるよう、文科省から通知が出されている。しかし、これが学校までストレートに行く訳ではない。都道府県でスキームをつくらないといけない。

教育未来創造会議が第一次提言を出し、大学と社会のあり方についてまとめた。1点目が未来を育む大学等の機能強化、2点目が新たな時代に対応する学校の学びの支援の充実、3点目がリカレント教育の推進だ。理系の受け皿となる大学を拡充すること、特に、女性が理系分野で活躍していける社会を開拓することもあげられている。理数系は活用の目的がないから遅れてきたのだと思う。そして、大学に文理横断の大学入試選抜を実施するよう強く促している。高等学校においても文理分断の教育から脱却してほしい。

日本の出生数は2016年に100万人を下回り、その後も毎年減少しコロナ禍、2021年に過去最少となった。2022年時点での0歳から14歳の人口は1,503万人、それが2030年には1,321万人、2040年には1,194万人と20%減る。子供の数が減少していく中で、中等教育のさらなる尽力が必要だ。そういう中で、私立高等学校に通う生徒数の比率は全高校生の33.6%と3割を優に超すようになってきたが、人数を見ると毎年減っている。公立はもっと減っている。私立中学校に通う生徒は増えてきている。それは、私立学校の英語教育、ICT教育の頑張りを保護者が見て入学させてくれているからだ。

私立中学校に通う生徒への授業料減免が今年から始まる。中学生の家計急変を支援する制度で、中学校卒業まで支援し、高等学校修学支援金につなげる。家計急変を理由に退学しなくてもすむということだ。少しでも私立学校に通う生徒を増やして行きたい。ガバナンス改革では、所轄庁の違いや、法人の規模を考慮することになった。高等学校教育については、学教法施行規則や通信制の改正の動きがでてきた。そして、運動部の地域スポーツ化という話がでてきているが、本当に良い先生がくるのか疑問だ。さらにもし、地域スポーツの人たちを監督として出す場合は、誰が責任をとるのかなど課題が残っている。現在抱えている私学経営の問題を、改めて我々が理解しないと大変なことになる。私立学校が一校でも良い方向に進めるよう協力してほしい。



◇基調講演◇

「伝えるのは命 繋ぐのは命」 坂東元（旭川市旭山動物園園長）

約 2 年前に新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、様々なことを考えさせられた。人間は自分たちが全てを制御できるような錯覚に陥っている。医療が太刀打ちできないものがあるというのがパニックの原因だったのだろう。人間は自分たちだけのルールを作って環境を作り変えて生きてきた。何百万年かけて作り上げられた調和とバランスの中に、土足で踏み込んで欲しいものを奪って生きてきた。根本的なところで一度立ち止まらないと、遠くないところで同じようなことが起きる。



さて、旭山動物園は新型コロナウイルス感染症の流行により 2 年前の 4 月は春の開園ができなかった。そこで Instagram でライブ配信を始めたところ、2~3 万人であったフォロワーが今では 25 万人まで増え、リアルではない部分の情報発信の力を実感した。開園後は配信を見て元気づけられていたと声をかけられた。動物園での教育活動においても、遠方の学校と繋がることができ、未来の可能性が見えた気がしている。動物園の中にいると外の慌ただしい状況が分からないくらい、動物たちは影響を受けずに大きく成長した。動物たちの命を繋ぐというのは決して簡単ではない。来園者の様子を見ている、動物園は楽しければいい場所という見方がコロナ禍を経て変わってきた気がする。動物園は命の営みを見続ける場所であり、成長や老い、死を感じる場所だ。

旭山動物園は今年で開園から 55 年だ。かつては評価軸として来園者数があり、見飽きられると違う動物を入れるということを繰り返してきた。入園して人の手がかかっている野生種の動物に触れた時、人に依存しない自分の生き方を持つ生き物が素晴らしいと思った。その素晴らしい動物が飽きられ、つまらないと言われ、旭山動物園は閉園寸前に追い込まれていた。かつてラッコが大ブームだった頃、大人はアザラシを見る子供に、それはただのアザラシだと必ず言った。それまで凄惨だと思っていたものが色あせてしまう。大人の価値観が子供に乗り移った瞬間だ。こういうことは日常の中に沢山ある。そして「ただのアザラシ」にしたのは、命を預かっている側の私たちだった。閉塞感を感じる今日、2030 年を同じように迎えられる保証はない。こういう環境にしたのも、問題が蓄積しているのも大人の責任だ。子供たちが大人と同じような価値観を持っていれば扱いやすいのかもしれないが、それでは絶対に未来は変わらない。アザラシだって素晴らしいと思いつける子供が社会人になったら、我々とは違うアプローチを見つけるだろう。素晴らしいものを素晴らしくないとしてきた私たちが、それは間違っていたと言わなければならない。

30 年程前にワンポイントガイドを始めた。当時は画期的な試みで、本当に動物園を応援してくれる人たちの層が形成された時代だった。動物の本質的な価値を追求し来園者と真剣に向き合い、長い目で物事を見て、収支を超えて来園者に何を還元できるか考えてきた。平成 8~9 年頃に猛獣類施設の再整備ができることになった時には、自分たちが素晴らしさを感じる瞬間を突き詰め、それを来園者にも見てもらおうと考えた。動物園は学校にも似ていると思うのだが、管理しようと思ったら徹底的に管理ができるが、動物たちはその環境で使う必要のある能力しか発揮できない。潜在的に眠っているものを目覚めさせてあげるのが私たちの仕事だ。動物園は人のエゴで作った場所で、その原罪を背負いながら命に対する責任の取り方を突き詰めて考えて、後はありのままを見てもらう。ありのままが素晴らしいという考えのもと再整備を進めた。結果として猛獣類施設は、ヒョウがお客さんの頭上に寝ているような形になり、このような展示が行動展示と呼ばれるようになった。毎年、施設をリニューアルしていったが、これまでどう見せようか、どう見たいか、といった人間の理屈だけで作られてきた動物園ではなく、まず動物がその動物らしく一生を過ごせる施設を具体化しようと考えた。奇抜なものを作ろうと思ったことはないが、動物を軸に考えていった結果、このような発想がなかったのが日本初、世界初という施設になった。冬のペンギンの散歩も、閉園後に行っていたものをせっかくだから見てもらおうと始めたもので、訓練も準備も

していない。本来持っているものを引き出すことが大切だと思う。天然の雪と寒さの中でペンギンと空間を共有するのは、旭山動物園でしかできないことだ。環境問題を考える時、人間は頭では理解していても、なかなか行動は変わらない。心に、気持ちに届かなければ行動に繋がらないのだ。動物園は、知識が実際に何に繋がっているのか実感できる場所だ。動物が潜在的に持つ能力はまだまだある。廃園寸前だった時のつまらない動物園は、究極に安全だった。何も工夫がなく全てが檻の中にあり、怪我もしない。今の施設は危険な部分もあるが、だからこそ全てが生き生きしている。子供たちも同じだと思う。子供からお年寄りまでが安全な設備にしようとする、それ以上の能力を持つ人が能力を使う場を失っていく。目指しているのは動物らしい営みができるということだ。そのような環境があって初めて、動物のこれまで見られなかった能力や感情が見られるようになった。行動展示については、お客さんを猫じゃらしに見立てるとというのが旭山動物園の発想だ。こちらが見ているようで、実は動物の方がこちらを見ている。動物にとって予測できない動きをする生き物はお客さんしかいないので、お客さんを上手く使えないのかと発想を転換した。

その他の取り組みとしては、学校教育との連携、もぐもぐタイムや、手書きの看板、あとは死の公表などがある。旭山動物園で圧倒的なのは手書きの情報発信だ。手で書いたものの方が心に届くということを実感し、臨機応変に情報更新をしながら徹底している。旭山動物園は串団子のような組織だ。擬人化しない、人の価値観の中に取り込んで動物の尊厳を傷つけない、という軸に刺さってさえいれば、何をしてもいい。全員を同じようにしてしまうと、かみ合うところがない。それぞれが長所と短所の組み合わせでできていて、かみ合った時が強い気がする。実は旭山動物園は専門職員が多い組織ではないが、お客さんに気持ちを届けることができている。やはり理念や軸を持つことが大切だ。近年では来園者数も安定している。旭山動物園では、アザラシは泳いでいるだけだし、ペンギンは歩いているだけ。そのことがきちんと毎年、人の心をつかんでいる。特別なことはなくても足を止めてもらえる。つまらないを素晴らしいに変えていったことが評価に繋がってきたと思う。

死の公表は、動物園界で大いに議論になった。人間は医療を前提とした生命観を持っているが、動物には医療という概念はない。動物は自然の中で、食物連鎖の中で生きている。食物連鎖の中で命が輝き続けている。自分を食べる都合の悪い存在とも共存していく。動物園ではその存在を輪から外し、ある意味終われない命になる。しかし終わりは必ず来るもので、その扱いが難しい。延命はできるが、延命の先が見えない。動物は治療という概念を持たない。特に動物園の動物の場合は人も信用していないので、信用していないもの前で意識を失うというのは死を意味する。麻酔をしての治療行為というのは死の恐怖の連続だ。ある程度何かをしてやったという自己満足の部分が、もしかしたら動物の最期を不幸なものにしているかもしれない。生き物を飼うというのは、最終的には最期をどう看取るかに行き着く。そのあり方が飼育の質を決めると思う。旭山動物園では安楽死を選択肢に入れて治療している。学校教育との連携においては、命をテーマに学びたいと来る学校も多い。元気に動き回る動物を見て、命が大切だと感じることはない。死に向き合って初めて命というものを考えられる。動物園は死がたくさんある場所だ。飼育個体を維持するのは、動物園でも大変な状況にある。飼育は主に大人の動物を想定しているが、成長過程の子供は予想もつかない行動をする。子供も同じだと思うが、先回りして可能性を読む必要がある。色々な形で死はやってくる。その死という経験を次にどう活かしていくかを考えている。生まれることや死ぬことを身近に感じられない時代になっている。死後にその存在が心の中にあること、それがきっと生きる力に繋がっていく。旭山動物園では、人間の価値観になってしまうので、お葬式もお誕生日会も行わない。生まれたら死ぬ、その淡々とした事実をしっかりと伝えていこうと思っている。命を預かり、最期まで命に対する責任を取っていく。ほんの些細なことで最期を迎えられないこともある。そんな中で動物園は、何を目指していくのかというコンセプトや理念がとても大切だ。飼育動物とお客さんを繋ぐことはもちろん、飼育動物のふるさとと来園者を繋ぐ架け橋になって、保全のプラットフォームになっていくことがここ 10 年の大きな目標だ。身近な生物や環境に向き合っていくための活動をしていきたい。

◇報告Ⅰ◇

「北海道私学の現状と課題」 木村重成（北海道総務部教育・法人局学事課課長）

北海道の全日制私立高等学校は50校で、私立の占める割合は約2割、生徒数は約3割であり、10年前と比較すると、私立高等学校は4校減、公立は21校減となっている。生徒数は公立が2割超減っているが、私立は微増しており、就学支援制度の充実による影響が考えられる。中学校の学校数、生徒数の私立が占める割合はいずれも約3%で、10年前と比較すると、公立と比べて減少幅が少ない。

私立学校を取り巻く状況について、高校の充足率は、平成30年を境に全国平均を上回り、令和3年では、全国の86.1%に対して北海道は90.1%、さらに、令和4年は92.4%と増加している。中学卒業者は昭和63年の約9万2千人から令和3年の約4万1千人へと6割減少し、今後も厳しい状況が続くと思われる。

北海道内の耐震化については、全国に対して遅れているので、他県の取組や施策等も分析して進めていきたい。ICTの整備状況について、児童生徒の1人1台端末の整備や校内通信ネットワーク環境の整備状況は、令和2年度末では全国より遅れている状況であるが、令和3~5年度に整備が進み、令和5年度には全国平均を上回る見込みとなっている。また、体罰・いじめについては、早期に認知して問題解決につなげていきたい。不登校者数は、減少傾向にあったが令和2年度に増加し、中途退学についても令和2年度に増加している。いずれもコロナの影響かと考えている。

道では、管理運営費補助金は、毎年単価を伸ばして予算総額を確保し、各校の特色ある取組に対して加算措置を行うとともに、修学支援では、国の就学支援金への上乗せ補助の取組を行うなど、私学助成の充実を図っている。



◇報告Ⅱ◇

「未来を自分達でつくることができる、クリエイティブ・クラスの若者の養成」 平方邦行（当研究所理事・所長）

若者が未来を自分たちでつくることが重要だ。そのためにはクリエイティブ・クラスの若者を育てるような活動をしていかないといけない。いままで、私たちがやってきたのはファーストクラスを育てる教育だった。特に今の若者たち、Z世代やα世代への教育を考えていきたい。故郷を棄て、大都会の中で自己を磨いて自己を確立した芸術家は、北海道出身者の中にもたくさんいた。しかし、北海道の大地の中で一步も退くことなく過酷な自然と格闘しながら、日常の生活を通して自分に深く切込んで作品を残した画家がいた。画家、神田日勝は、「結局どういう作品が生まれるかは、どういう生き方をするかにかかっている」と言っている。彼は特別な美術教育を受けず、自分の生活から生まれたものを真剣に追求して表現として残した。

明治時代に私学と官学の2つが誕生した。近世の私塾には理念・理想があった。それが私学の建学の精神につながって行く。建学の精神は崇高なものだ。創立当時の魂が込められている。生徒にとっても大切なもので、在学時も卒業した後も、困難にぶつかったときに屈することなく、高邁な精神を持って生きていくための指針でなくてはならない。その根底には哲学があり、哲学をどう教育に活かしていくのが問題だ。伝統と革新の統合を行う必要がある。

1989年以降、グローバル化の広がりとともに、先進国ではリーダーたちが、今後どういう世界になっても、未知のことを解決できるような若者を育てようと、教育改革を行った。2000年以降視察した海外の学校は日本の教育とは大きく異なり、生徒がノートパソコンを授業で使用する、双方向型の教育に変わっていた。グローバル教育と切り離せないのはPCと英語教育だ。世界の教育に対して、日本では、2022年の今でも教室内の風景も教育の内容も変わっていない。しかし、今回の学習指導要領改訂で、「創造性」という言葉が入っている。主体的・対話的で深い学びは、この創造性を養うことにつくる。論理的思考力にとどまらず、創造的思考力を学校教育の中で身につけるために教科指導や、それ以外の活動をどうするのか真剣に考えないといけない。しかし、教師が課題を設定してしまうと本当に深い学びができない。深い学びには興味関心をひらくことが重要だ。そして、思いやりや、感性などを無視して深い学びにはならない。評価するには思考コードをつくっていかないと評価にできない。

変革の時代という認識をもって、私立学校が前に進んでいけるような、しっかりとした精神をもってやってほしい。



◇パネル・ディスカッション◇

「躍進する私学～未来をつくる経営とは～」

パネリスト：北村 聡（京都外大西高等学校前校長）

浅里慎也（北星学園女子中学高等学校校長）

鈴木康之（水戸女子高等学校理事長・校長）

コーディネーター：広石英記（東京電機大学副学長）



（北村聡・京都外大西高等学校前校長、浅里慎也・北星学園女子中学高等学校校長、鈴木康之・水戸女子高等学校理事長・校長、広石英記・東京電機大学副学長）

◎私学経営で最も大切にしていること

●広石氏：初めに私学経営で最も大切にしていることを、パネリストの先生方から発表してもらおう。

○北村氏：建学の精神の継承の使命感に尽きる。私学は、こういう人間を日本、世界のために育てたいという熱い思いで創立された。建学の精神そして多様性、独自性、先進性を発揮しながら、日本の教育を支える存在として発展していかなければならないと感じている。

○浅里氏：建学の精神を式典など事あるごとにテーマとして取り上げている。わが校は女子校で創立者は女性なので、入学式には、皆さんの歩く前には創立者の足跡がついているので、それを見失わないようにと話をしている。また、創立者が宣教師なので、聖書の中から各学年に聖句を与えて、1年間それを意識して生活するようにしている。それから、もう一つ大切にしていることは、女子教育の可能性だ。生徒たちが社会に出て行ったときに力になる女子教育を目指している。

○鈴木氏：私学が公立学校と大きく違うのは使命感を持っていることだ。その使命感の源が建学精神であり、建学精神を支えるのが人だ。経営者の使命は、何のために教育活動を行っているかを常に点検することだと考える。

●広石氏：近年の共学化の趨勢や時代の変化の中で、建学の精神の伝統をどこまで引き継ぎ、そして時代に合わせて革新していけば良いのか。

○北村氏：本校は平成元年度に男子校から共学に移行した。創立者は会津の人だったので、建学の精神は「不撓不屈」というもので、自然に性別を乗り越えて移行することができた。また部活動を大切にすることは性別を越えて母校愛の醸成に貢献すると思う。

○浅里氏：建学の精神は、昔の言葉では今の生徒には伝わらない部分があると感じたので、創立者が生きていたらどうするだろうかと考え、現在の生徒が受け取りやすいように、分かりやすい言葉遣いに変えたりした。

○鈴木氏：生え抜きの中堅若手教員から基本に立ち返る良い機会だという要望を受けて、2年間限定で基本問題検討委員会を立ち上げた。今まさに、建学精神をどのように生徒や保護者に理解してもらおうか検討している。校訓も昔の言葉で書かれているので、現代風に直して生徒に伝えていこうと取り組んでいる最中だ。令和6年度にはあらゆる基本的なものを改善しスタートしていく予定だ。

◎多様な入学者に個別最適な学びを提供する工夫

●広石氏：文部科学省の中央教育審議会が出した令和の日本型教育に関する答申では、個別最適な学びが強調されている。この個別最適な学びの提供で工夫していることはあるか。

○北村氏：以前は学年ごとに習熟度別クラスを作ったりしたが、うまくいかなかった。それで若手の教員を中心に研修し、アクティブラーニングの形を取った授業展開に実験的に取り組んできた。そして多様な生徒に自然にマッチングした授業ができることを確信した。準備に時間がかかり過ぎて大変なだけではないのか、正直に言えばそう思ったこともあったが、生徒の、普段の教室では見ることができなかった姿を見られて感動した。新しい授業形態に粘り強く取り組むことで、個性にあった授業を実施できると考えている。

○浅里氏：入学して来る生徒は、保護者も含め本当に多様だ。入学式で必ず私が生徒に言うのは、命の大切さ、それから必ず居場所があるということだ。生徒たちに社会とのつながりを持たせるために中学 2 年生から商品開発に関わらせている。受け入れてくれた会社の社員の方々と一緒に幼いながら大人との対話、マーケティングなどに携わる中で、自分の興味に目を向けるようになった。他にも中学生に、卒業生がいる大学の研究室に行き、先輩から話を聞くということもしている。そして、生徒が自分の興味に向かっていくために安心できる場所であることに力を入れている。

○鈴木氏：生徒募集のオープンスクールという予約制のイベントでは、必ず私に対応する。そのときに、あなたが幸せになるための力を養い、社会に貢献する女性として育てることが、私が3年間あなたを預かる目的である、と話す。創造力の原点は知識欲だと考えており、図書館を、知識欲を広げる空間にする試みも始めた。図書館はドアも壁もなくし、生徒は自由に入出りできるようにした。司書は昼過ぎから夜の7時までの勤務として生徒がその時間まで利用できるようにしている。校長のコーナーがあり、毎週1冊本を提供し、自分が読んだ感想を書いて置いておくと、興味を持って手に取ってくれる。色々な本を置いて、気軽に本を読めるよう工夫している。また、不登校の生徒には、学校が人生を変える最後の砦だと思って関わっている。

◎少子化時代に対応した私学の経営戦略について

●広石氏：少子化が加速する状況で、私学が建学の精神を教育プログラムに落とし込み、個性ある教育ができていても私学同士の競争が進んでいくのは避けられない。今後の経営戦略についての考えを聞かせてほしい。

○北村氏：司馬遼太郎が、江戸時代に私塾の多様性があったからこそ明治維新が成功したと言っている。だから私学間で競争し、その多様性と独自性の中で日本の教育を推進していくという気概を持って進んでいきたい。競争意識をもつことはお互いに切磋琢磨することに繋がるので、大切ではないかと思う。絶え間ない教員研修が必要だ。

○浅里氏：学校の強み、一定の評価を得ているものをさらに打ち出していくことが大切だ。わが校では基督教教育と札幌には2校しかない女子教育という特徴を打ち出し、アメリカ人の創立者が力を入れてきた英語教育の伝統も継承していきたい。少子化だけではなく教員にアピールするために職場環境を変え、魅力的な職場にすることが非常に大切なので、女性が働きやすい職場づくりを実行したいと思っている。

○鈴木氏：毎年4月に私は教職員の基本方針を打ち出している。今年は「私学人としてのプライドを常に心に」とした。私学には、建学精神のもと、師弟同行から生まれる品格が必ずある。こうした品格が信頼感につながる。学校の一体感、教職員、生徒から感じる誇り、これが最大の差別化だと思っている。

◎部活動のアウトソーシング化

○広石氏：参加者からの質問を紹介する。文科省は教員の働き方改革を進め、公立学校では部活動をアウトソーシングするという方針が出された。課外活動を重要な教育活動と位置づけている私学はこれにどう対抗すれば良いか。

○北村氏：本校では変形労働時間制を導入している。毎年副校長や事務長がダイアグラムを作り、このダイヤの通りに出勤してもらっている。野球部監督は練習が終わると遅くなるので、週に何回かは昼からの勤務にして、話し合いで調整をしている。

○浅里氏：労働者過半数代表者と定期的に話すようにしているが、具体的な案は中々生まれまれない。ただこの問題は避けて通れない。部活動で少しでも好きな競技をしたいと入学してくる生徒もいて、その子たちにいくらかでも教えたいという教員もいる。変形労働時間制でうちの学校にふさわしい形を見つけようとしている。

○鈴木氏：変形労働時間制の実施、それから、勤務時間を正確に把握し、かつ職員会議などの全体の活動は、退勤時間を超えないようにという指導をしている。外部の指導者を嘱託扱いで招いたこともあったが、意思の疎通がうまく図れなかった。

○北村氏：部活動は外部の専門家ではなく、普段から生徒と接しているクラス・教科を受け持っている先生が良いと考えている。

◎若手教員の採用

●広石氏：さらに難しい課題として、私学に理解のある若手の教員の採用がある。若手の教員の採用に関して、どう考えているか。

○北村氏：特に理科系の先生を見つけることが厳しい状況が続いている。基本的には、本校は上に大学があるので、大学のキャリアサポートセンターで普段から情報収集を心掛けている。大学は英語と国語科しかないので、その他の教科は、いろいろな大学の教職課程の関係者とコネクションづくりが大切になる。

○浅里氏：質の高い授業ができる、特別な技能があるというだけでは、人となりが分からない。建学の精神や学校の歴史を理解し、チームワークができる人が必要だ。

○鈴木氏：茨城県私学協会は、民間の人材派遣会社と契約して、茨城県の私学で働きたいという人が登録をし、教科ごとに登録者一覧が出てきて個々の学校で対応するというシステムがある。本校でも昨年 1 人採用できた。また、卒業生は学校のあり方を分かっているので、教育実習にきた時に声をかけたりもしている。

◎組織の硬直化を防ぐには

●広石氏：私学の強みには教員の異動がないことがあるが、逆にそれで組織が硬直化し、新しい挑戦への足かせになることはないか。

○北村氏：新型コロナウイルスで好むと好まざるにかかわらず、ICT に取り組まなければならない状況になった。若手の教員たちがグループを作って、ベテランの先生に研修をするという形が去年の夏前からできた。順調に進んで去年の後半ぐらいからベテランの先生方も教室で ICT を使いながら授業展開できるようになった。教員の異動がないことは、良い面もあれば、悪い面もある。研修に教員を積極的に派遣し、外の先生方と交流し、刺激を受け、研鑽を積むのが良いかと思う。

○浅里氏：校務分掌の長を 40 代の若手にほとんど代えた。見ていて大変そうだが、若手の方が発想や行動力がある分、良い方向に進むのではないかと思い、できるだけ応援をしながら取り組んでいる。

○鈴木氏：若い人が提案しても部長のところまで止まってしまい、提案が校長に届かない。あるいは直接校長に提案してそれを進めてしまうと、部長級は不愉快になってしまう。やはりシステムをきちんと作らなければいけないと思う。

◎私学人としてのプライドを持つには

●広石氏：「私学人としてのプライド」という言葉に勇気づけられた。私学人としてのプライドを持ってもらうために、具体的な工夫があれば教えてほしい。

○北村氏：本校は、他校にここは負けられない建学の精神と将来があるということを、職員会議でも個人面談でも熱く語ることが大切だ。本校は教員評価制度を取り入れ、年に 4 回は全員面談をする。その場で直接語りかけている。

○浅里氏：卒業時に子供たちに無記名でアンケートを取るが、90%以上が学校に満足したと回答をしてくれて、本当に良かったと思う。そして、頑張って社会で働きたいという声を実際に聞くと、うちに勤めてよかったと感じる。そうした感情を先生たちにも持ってほしい。

○鈴木氏：学校では上手くいくこともあるが、上手くいかないこともたくさんある。我々は正しいことを、心を込めてやっている。卒業後になるかもしれないけれど、必ず生徒たちは応えてくれる。上手くいかないときにこそ、そう声をかけるのが大事だ。本校では朝会が毎朝あるので、校長がリアルタイムで部活の成績など、上手くいったことを知らせている。全校集会で私が生徒たちに話す内容には教員にも聞いてほしいことを折り混ぜて話をするようにしている。

●広石氏：本日は 3 人の先生方に、経験に基づいて話してもらった。本日のパネル・ディスカッションが研修会参加者の今後の経営のヒントになればと思っている。



◇教育懇談会◇



(平方邦行・当研究所理事・所長、明上山勝己・北海道私立中学高等学校協会副会長、八尋太郎・福岡県私学協会会長、山中幸平・当研究所副理事長)
平方邦行・当研究所理事・所長の主催者挨拶に始まり、明上山勝己・北海道私立中学高等学校協会副会長の挨拶の後、参加者は少人数でパーティション越しに交流を図った。八尋太郎・福岡県私学協会会長が次年度当研修会開催地を代表して歓迎の意を表し、最後に山中幸平・当研究所副理事長より閉会挨拶があり、盛況のうちに閉会となった。

◇意見交換会◇

摺河祐彦・当研究所私学経営専門委員が総合進行役を務め、分科会(グループ討議)と全体会(分科会報告)の2部構成で行われた。各グループでは当研究所役員・専門委員らが世話役として、①新時代の経営ビジョン ②次世代を育む教育 ③これからの教職員のキャリア形成 ④私学の特色と情報発信の4つの重点テーマで討議を進めた。(テーマ①②が3グループ、テーマ③④は2グループ)分科会での議論は、全体会でテーマ毎に代表グループの世話役より報告された。

①新時代の経営ビジョン 加藤晃孝(八王子実践中学高等学校校長補佐)

少子高齢化や公立校との差別化、働き方改革や教員の志望者が少なくなっていることや教員採用の問題、リスクマネジメント、都道府県とのかかわり、ICTの導入やICTについての教員の研修、建学の精神の具現化について、生徒募集の話題がでた。これらの中で、建学の精神の具体化が大きな問題だった。先生方が同じベクトルで進んで行くにはどうしたらいいのかを話し合った。



②次世代を育む教育 長塚篤夫(当研究所副理事長・私学経営専門委員長)

新しいことをはじめていない学校はない状況で、1つ取り組めば次世代を育む教育ということではなく、英語教育を含めて各学校がグローバル教育を実践する必要がある。ICTは教員が中々活用できてない。特にプログラミングができる教員がいないことが多くの学校で課題になっている。各学校の取り組みが始まっているということを感じた。



③これからの教職員のキャリア形成 浅里慎也(北星学園女子中学高等学校校長)

働き方改革は、教員数が増えても仕事量が減らない現状を改善するために、全体の働き方を考えないといけない。その他、部活動の外部委託について話し合った。女性の産休・育休とともに男性の育休取得が広がっているのは良いことだと意見が出された。教員の評価についても各学校で違いがあり、採用についても学校の教育方針に共感を持てる先生たちに来てもらうため、さらに工夫しないといけない。



④私学の特色と情報発信 菅沼宏比古(学校法人西海学園理事長)

私学の特色教育というのは各学校の伝統・歴史・地域・生徒の特質が違うので一概には言えず、それぞれが取り組んでいる。各校の特色をいかに中学生や地域に発信するかが広報である。最も重要なところは理事長や校長などトップが動かないといけない。ICTなど情報発信ツールは若手の先生に取り組んでもらうことが必要だ。



最後に総合進行役の摺河祐彦・私学経営専門委員が、「我々私学は、やはり建学の精神を教育理念として、日々の教育活動を行わなければいけないと思っている。それをもとに経営や教育を作り上げ、しっかりと教員に伝えて研修などで身につける。そしていかに魅力的に世の中に伝えるか。この意見交換会が、建学の精神を見つめ直す機会となっただろう。」と締めくくった。



◇総括◇

長塚篤夫（当研究所副理事長・私学経営専門委員長）

曖昧な時代において、その状況を把握し、柔軟に対処することがますます求められていく。創造性と社会性というのは人間にとって本質的な資質である。創造的な学力と社会的な人間を育てるという、多くの私学が掲げる普遍的な教育をこれからも疎かにしてはいけない。学校はうまくいく場合だけではないと思うが、生徒たちの未来に影響を与えることができる、また与えてしまうという覚悟を持って学校を運営していく必要がある。少子化の中で、如何に未来をつくる経営をするかという論議はまだまだ深めなくてはならない。



◇学校視察◇

【A コース：酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校】

谷山弘行・学校法人酪農学園理事長による挨拶の後、同校でとれた農作物等でつくられたランチボックスで昼食をとった。広大なキャンパス内をバスで回りながら、動物病院、中央館、作物ステーション、黒澤記念講堂を視察し、堂地修・同校理事／酪農学園大学学長から挨拶があり、終了した。参加者にとって得がたい機会となり、充実した視察であった。



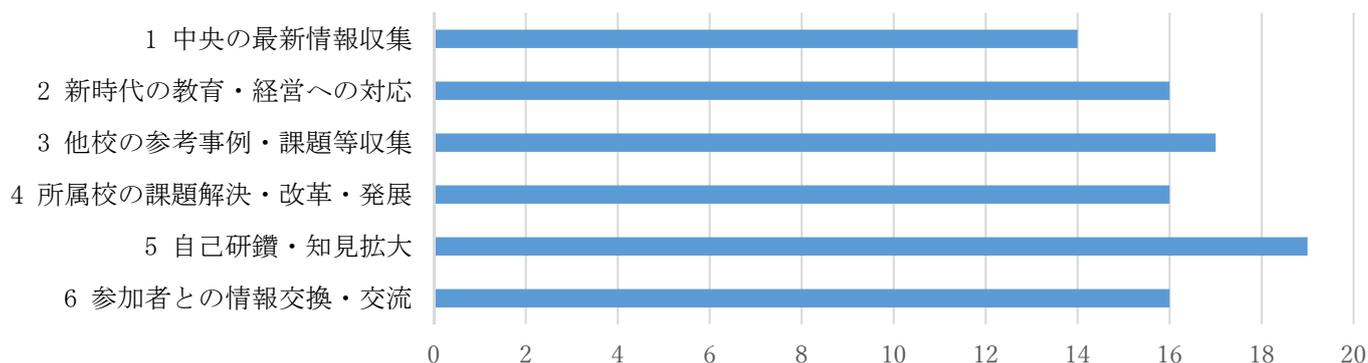
【B コース：北嶺中・高等学校】

谷地田穰・北嶺中・高等学校校長による挨拶と学校紹介の後、青雲寮と学校見学を行った。青雲寮では充実した共用スペースや寮室を見学し、寮生活の様子をイメージすることができた。学校見学では、施設のほかに授業の様子も視察した。質疑応答では多くの質問が寄せられ、参加者にとって実りの多い学校視察となった。



◇参加者アンケートより◇（回答数 41 名／参加 124 名・回答率 33%）

○参加目的



○講演（吉田理事長）

- ・国の動向、私学への助成などの情報が大変参考になった。
- ・私学が抱える課題や、これからの私学教育のあるべき姿など考えさせられることが多々あり、勉強になった。
- ・時代の変革期こそ、私学が一致団結していく必要性がよく理解できた。

○基調講演（坂東氏）

- ・命について深く考えることができる素晴らしい講演だった。
- ・動物園経営と学校経営の共通性から学ぶことが非常に多かった。
- ・V字回復の軌跡が学校再建のそれと重なり、大切にすべき点が同じであることを確認できた。

○報告Ⅰ（北海道）

- ・道内の私学の現状をデータ（行政側の）に照らし合わせ説明してもらい理解できた。
- ・地域の私学行政施策の現状を理解できた。地元だがこのような説明が得られ良い機会となった。
- ・行政の面だけでなく、特色ある教育について紹介があったのが良かった。

○報告Ⅱ（平方所長）

- ・Z世代、α世代をしっかりと理解して、彼らが歩むべき未来を見据えた教育を行う必要があると感じた。
- ・本校の教育改善はまだまだ途上であり、課題が山積みしているが、より良い教育活動へのヒントを得た。
- ・私学の歴史、経営方針を大切に、新たな発想で教育活動に取り組むことの重要性が感じられた。

○パネル・ディスカッション

- ・難しい3つのテーマに3校のパネリストの取り組みを聞き、課題の温度感を共有でき有意義だった。
- ・パネリストそれぞれの意見や考えが刺激になった。
- ・学校の状況によって、校長の経営に対する姿勢が違っている点が参考になった。

○教育懇談会

- ・なかなか他の私学の状況について知る機会がないため、とても参考になり、心強く感じた。
- ・交流が活発に行うことができ、交友関係が広がった。
- ・肩の力が抜けた状態で、気軽に話げできた。各学校の抱える問題を聞くことができた。

○意見交換会

- ・多岐にわたる意見交換、情報交換ができて良かった。
- ・各学校の懸案等について実状は共通しており、今後の参考になった
- ・自分が発言できる時間があったのが良かった。具体的なアドバイスももらえた。

○学校視察

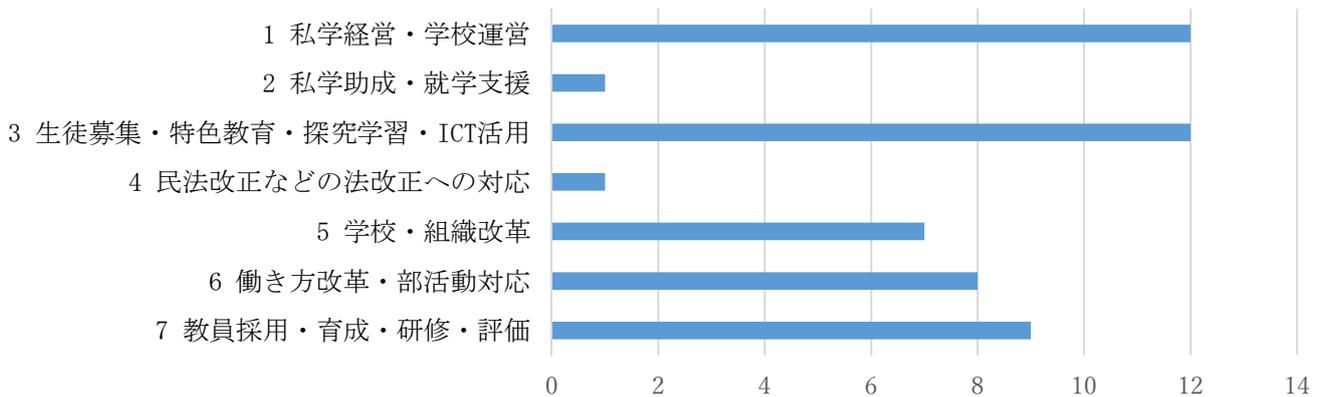
【酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校】

- ・規模感や施設、整備が東京では真似できない。校長先生が日本の食を支えるために勉強していると述べており、食料自給率が低い日本には重要なことだと思った。
- ・昼食中の動画を見て涙がでそうになった。高い志を持って学校経営を行うことを決意した。

【北嶺中・高等学校】

- ・北嶺中学高等学校の視察は期待していた以上のインパクトがあった。大変良かった。
- ・8つの特色あるプロジェクトが大変参考になった。

○喫緊の課題



○来年度以降の要望

- ・財政（財務分析）など数字と向き合う機会をつくってほしい。
- ・「建学の精神」をすべての教育活動にいかに浸透させていくか。
- ・教員の採用・育成・マネジメント（管理職、ミドルリーダーの育成、問題ある教員の扱い等）。

◇都道府県別参加者数◇

No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数
1	北海道	38	11	群馬	0	21	岐阜	2	30	和歌山	0	39	高知	0
2	青森	0	12	埼玉	1	22	静岡	4	31	鳥取	2	40	福岡	6
3	岩手	0	13	千葉	6	23	愛知	0	32	島根	0	41	佐賀	0
4	宮城	2	14	神奈川	6	24	三重	1	33	岡山	1	42	長崎	1
5	秋田	0	15	東京	31	25	滋賀	0	34	広島	3	43	熊本	0
6	山形	2	16	富山	1	26	京都	3	35	山口	0	44	大分	0
7	福島	2	17	石川	1	27	大阪	7	36	徳島	0	45	宮崎	0
8	新潟	0	18	福井	0	28	兵庫	2	37	香川	0	46	鹿児島	0
9	茨城	2	19	山梨	0	29	奈良	0	38	愛媛	0	47	沖縄	0
10	栃木	0	20	長野	0	計22都道府県124名								

次年度（令和5年度）私学経営研修会は
福岡県福岡市・ホテルオークラ福岡 において
令和5年6月1日（木）～6月2日（金）に開催致します。
